＜　その他作物の防除技術　＞

コ　スタイナーネマ　カーポカプサエによる防除法

スタイナーネマ　カーポカプサエ(*Steinernema　carpocapsa*e)は、土壌中に生息する昆虫寄生性のセンチュウである。

(ｱ) 剤の特性

a　スタイナーネマ　カーポカプサエ感染態３期幼虫

b　昆虫体内に侵入した後、本種の共生細菌の放出により寄生を受けた昆虫幼虫は敗血症となり死亡する。感染態３期幼虫は昆虫体外に脱出し、次の宿主を求めて分散する。

c　保存性　５℃で４か月

(ｲ) 放飼方法

薬液は30℃以下の水で直射日光の当たらない場所で調製し、調製後はできるだけ速やかに使用する。センチュウは沈みやすいので常にかき混ぜながら散布する。

(ｳ) 使用上の注意事項

a　使用する直前まで冷暗所（５℃）に保存する。ただし、乾燥及び冷凍は避ける。

b　乾燥や高温時または地温が15℃以下の低温時には効果が劣るため、使用は避ける。

c　かんしょに使用する際はできるだけ多量の水で株元に灌注する。

d　野菜類、花き類・観葉植物の土壌灌注で使用する場合は、ハスモンヨトウの老齢幼虫防除を目的とし、灌水チューブあるいは手灌注により株元に処理する。薬液が葉に付着したときは汚れが残るので、薬液が乾燥する前に散水し洗い流す。

e　芝に使用する際は、曇天または小雨の時に行うことが望ましい。晴天時はなるべく日没後とする。芝が乾燥しているときは散布前にあらかじめ散水する。センチュウは芝の表面にも付着するので散布後も十分散水する。

f　花き類・観葉植物に使用する際は、幼虫防除を目的とし、株元に潅注する。薬液が葉に付着した時は汚れが残るので、薬液が乾燥する前に散水し洗い流す。

g　果樹類に使用する際は、土壌中のモモシンクイガの中・老齢幼虫～夏繭防除を目的とする。散布場所はモモシンクイガ幼虫発生源土壌（果樹園、放任園）とし、繁茂した雑草等を取り除いた後に処理する。植物に付着したセンチュウを洗い流す「後散水」はより効果的である。なお、本剤は慣行防除の補完剤として密度を抑制し被害果率を下げるために使用する。

h　果樹類のコスカシバに使用する際は、虫糞が見られる所を中心に主幹部全体に散布する。おうとうでは収穫後、虫糞が見られる所を中心に散布する。散布液量は、目安として成木に対して１～５リットル程度とし、樹の大きさによって適宜調整する。散布は小雨時に行うことが望ましく、晴天時は避ける。

サ　パスツーリア　ペネトランスによるネコブセンチュウの防除法

パスツーリア　ペネトランス(*Pasteuria　penetrans*)は、ネコブセンチュウの体内でのみ増殖する絶対寄生性の出芽細菌である。1998年に農薬登録された。

(ｱ) 剤の特性

a　パスツーリア ペネトランス胞子

b　土壌中では胞子の形で存在し、センチュウ幼虫の体表に付着してから発芽し、植物根に侵入したセンチュウの体内で増殖する。本菌は寄生したセンチュウを殺さないが、産卵をさせないことで、次世代以降のセンチュウ密度を低下させる。

c　有効期限：常温で３年間

(ｲ) 使用上の注意事項

a　本剤は水に溶けにくいので、所定量の水に少量ずつ撹拌しながら加え、均一に分散させて散布する。

b　本剤は直接センチュウを殺さないため、センチュウ密度が高い場合は効果が劣るおそれがあることから、既存の殺センチュウ剤と併用することを推奨する。殺センチュウ剤を使用しない場合は、太陽熱処理等により土壌中のセンチュウ密度を低下させる技術との併用を推奨する。

c　クロルピクリンは本剤に影響を与えるので併用しない。